

# 1960年代のサークル「山脈の会」

発想とテーマについてのノート

The 1960s' Circle—The Yamanami no Kai : Notes on Ideas and Themes

OGUSHI Junji

## 大串潤児

### はじめに

本稿は、戦後直後に発足し、朝鮮戦争を契機にその思想の骨格（「知性の擁護」と「戦争は嫌だ！」）を形成し、ながい中断をへて一九五〇年代なかばに全国的規模のサークル運動となった「山脈の会」の一九六〇年代における活動とその個性的な問題提起のゆくえを、主としてその主催者である白鳥邦夫の思想を軸にして分析するためのノートである。「山脈の会」は、「私」への固執とその複合・組織化としてのサークルという「私」—共同の組織論、「底辺」論、「記録」論、そして「戦争体験」・戦争責任論など、戦後思想の軸とでもいうべき広汎な問題群を、人びとの「発想のチームワーク」のなかで創造し、深化させてきた集団である。このサークルが、どのように一九六〇年代という時代に向かい合ったか、を問うことは、逆に「一九六八年」の問題のひろがりや深さを考えるための照射軸の役割を果たす問いになるだろうと思う。

こうした課題を設定した理由の第一は、「一九六八年」の問題群をどのような歴史的射程をもって認識するか、という関心にある。一九六〇年代のなかばから、既存の社会運動・文化運動も、特に地域において新たな高揚を見せ始めた。政党や労働組合などにおける「系列化」の力学にさらされ、かつ大衆消費社会のなかで独自の文化運動の様式を模索しつつあった地域で活動が続いている従来からのサークル運動が、どのように自身の問題を深化させ、かつ新たな問題を創造していったのか。言い換えれば、「戦後民主主義」を批判したという「一九六八年」の問題群は、どのような主体形成の歴史的過程のなかから生まれてくるのか、という問いを考えるために、戦後直後にその初発点を刻み、一九五〇年代を通じて自己の力量を蓄えてきた「山脈の会」の一九六〇年代におけるありようを見つめることが重要であると考えた。

「山脈の会」を取り上げる第二の理由は、より「一九六八年」をめぐる問題群に内在したものである。「私」「私性（わたくし せい）」などといった言葉が「一九六八年」をめぐる社会運動や文化実践の表現史のなかに多く見出せることは、運動に「連帯」や共同性を持ち込む「問いかけ」（「～あなたとは～」）に対応しつつ現前する「私にとって」という問題ともあわせて、比較的よく指摘されることがだろう。問題はその先にあり、個々の社会運動や文化実践に、どのような思想以前の経験

が付着しているかであり、そこからどのように「私」という言葉へのこだわりが導出されてくるか、を考えることが重要だろう。そして、本稿で対象とするサークル運動「山脈の会」は、戦後サークル運動史のなかではほとんど唯一といっていいほどに「私」にこだわり続けた存在である。「山脈の会」の実践、それは「私」を「繰り返し」記録し、考え直し、表現することであり、ここでの力点は「繰り返し」そのものにある<sup>(1)</sup>。

同時に、一九六〇年代は、「私」の思想を構成する諸要素（経験史の位相）がこれまでと大きく変貌していく時期でもあった。そのことそのものが同時代にどれほど認識されていたのか、ということも大きな問題であるけれど、現前する戦争としてのベトナム戦争と15年戦争の経験、高度成長によって変貌していく地域社会、いずれもが思想以前の「私」を構成する経験に大きな影響をおよぼしたのであり、その意味では「山脈の会」も、一方ではこうした社会変動に対応し、同時に「私」が問い、問われる「一九六八年」の問題群に直面しつつ、自らの立脚点を模索して行くことになる。

「山脈の会」は全国的な組織ではあるけれども、主催者であった白鳥邦夫（およびサークル「能代山脈の会」メンバー）が暮らし続けた地域は、一九六〇年代の社会変動のなかで次第に周縁化されていく東北の小都市であり、また進学と就職／出郷と残留とで揺れ動く高校生たちや、変貌する地方小都市の周辺農村の生業に携わる人びとに向かい合う場所であった。「一九六八年」の問題群にとって「私」とは、まさにどのような「私」であり、それは単に時代の「風景」に止まらず、どの程度、個々人の経験史に刻印を残していたのか、逆に、「山脈の会」にとってみれば「一九六八年」を通じた「私」という概念の意味の変化や深化とはどういうものであったのか、を考えることが必要だろう。一九六〇年代の高度成長期は、個人に視点を合わせても移動（学歴や就職移動）による個人と地域とのあいだに横たわる成長環境の変化により、「私」そのものの中身や経験が広汎に問われた、あるいは問い直さるべきであった社会変動期であり、「私」を問い続けたサークル「山脈の会」が、「私」を問いかけた「一九六八年」の問題群にどのように向かい合ったのか、を考えることは、戦後思想における「私」問題の位相を明らかにする重要な問題であると考えられる。

「私」の反復する問い直しのなかで、「原点」や「根拠地」ということばも白鳥邦夫の文章のなかには出てくるようになる。また、高度成長のなかで激変する地域と生業をみつめ、かつとらえ直す視点としての「根拠地」という発想も、おそらく一般的な現場という意味以上に、私が暮らし、かわり、認識する総体としての地域、という側面が重要になってくる。「山脈の会」の提起した視座でいえば「底辺」の意味と、それがどのように時代状況に拮抗し得たか、という問題である。「山脈の会」が、どのような位相で「地域」（とその変動）をとらえようとしたのかを考える重要な手がかりとなる発想＝方法がここにあり、この点は、後述するように安保闘争以後に記録＝問題提起された、自らが暮らす地域は「私」が安易に複数化する地帯かどうか、という地域社会についての問題視角と関連している。そして、「山脈の会」のメンバーには、サークル運動は「私の原点の複合体」「多様な私の組織化」とも意識されているのであって、その意味では「私を活かす共同性」とは何か、という問題として「一九六八年」の問題群に連なっていると考える。そしてより問題の視野を広げれば、先述した「底辺」「記録」「戦争責任論」も、「農という保守の深層」（三里塚・福田克彦）、「ことば以前」（水俣病問題・石牟礼道子）、「個人原理と加害者性の相関」（平井連運動など）との関連が問題になってくるのだろう。本格的な分析はもとより果たせないけれど、本稿

は、一九六〇年代における「山脈の会」の諸活動に関するひとつのノートである。

## I. ポスト「安保闘争」—「山脈の会」と「原点」

周知のように、「山脈の会」は、元海軍経理学校生徒であった白鳥邦夫が中心となって旧制松本高等学校時代に刊行していた同人雑誌『名もなき花』のグループがその原型になっている。一九五〇年、朝鮮戦争を契機として「知性の擁護」を掲げて誌名を『山脈』とする。小学校教員や労働運動書記など、白鳥自身の戦後社会運動集団のなかでの経験とその挫折の結果による「中断」をへて、一九五六年に『山脈』を復刊、同時に、全国にまたがるサークルとして成長していった。白鳥は、復刊号（第14号）に「私の戦争責任」を書いており、「私」にこだわることと、戦争経験の総括が、彼の出発点を構成している。「私の」という観点から時代や生活の把握を試みるその発想と方法は、一九六〇年代の「安保闘争」の記録という仕事に典型的に見られ、同時に各地域の単位「山脈の会」サークル（その具体的な姿はいまだによくわからない）が、全国集会を開いて、「記録すること」、「底辺」の意味、戦争責任の問題、を集団のなかで論じていくこととなる。

サークル「山脈の会」については大竹勉による「記録」が優れている（註1の文献）。おおよそ一九七〇年代なかばまでの「山脈の会」のひとつの総括であるとともに、戦後のサークル思想史を考えるうえでの出発点ともなる文章である。そしてこの総括そのもののなかに「一九六八年」の経験をくぐった総括のありかたを読み取ることも可能だろう。

……自分の現場＝自分の中央とし、その現場を離れないで、そこにある事実に参加して、〈私〉の体験を、丹念に、何度も繰返して記録する。その体験は、現場の事実への参加のなかで得る実感や、そこで目撃するものから、その事実につらなる過去の一連のできごとにおける〈私〉の行動と証言、さらに〈私〉の存在を支えている〈私〉の内部の深いところにある体験＝「思想（生きる）の原点」までふくめる。そして、それぞれ異なる原理を持つさまざまな〈私〉による記録が、その〈私〉たちの構成する小集団によって複合されるなら……〈民衆による昭和史、あるいは戦後思想史〉と称されるような〈現代史〉が明らかになっていくだろう。また、このように現場で仕事をすすめる小集団がほかにもでき、そのいくつもの小集団が連合するなら、現場にある「思想の原点」が組み合わせられ、現場固有のさまざまな語り口が結び合わされることになるから、その時、「日本民族の真実の文化であるような文化」が創造され、〈中央〉から〈地方〉へとといったいまある文化支配の姿は変貌していくだろう。……

「山脈の会」は、一九五九年八月、第一回全国集会（長野県戸隠）で「約束」を作った。「《山脈の会》は、日本の底辺の生活と思想を掘りおこして、それを記録します」。ここでいわれる「底辺」とは多義的であり、むしろ一定の定義がなく「会員の自由な解釈のまま」となっている。だから「階級構造としての底辺」から「意識のもっとも深い言いあらわしにくい部分としての底辺」<sup>(2)</sup>、つまり、実在—実態—構造としての「底辺」から、経験をふりかえる方法としての「底辺」までのひろがりをもっている。「山脈の会の教訓はひとつです。《持続こそ美德である》<sup>(3)</sup>」をうたい、「山脈の会」は現在まで活動を続けている。

一九六〇年代のはじめ、藤田省三は「市民」の理念をささえる運動として「政治運動と社会運動と、文学運動とが、いっしょにからみ合った地点を追求してゆくような」サークルを指摘、鶴見俊

輔は藤田の発言をうけて「山脈の会」をそのモデルとして挙げている。ここで、鶴見が「山脈の会」を評価しているのは、能代を中心に「五、六県にまたがっている職場の連合になっている」からであり、「生活状況の落差のあるところの交流で成立している」ことによる。四国の「草の芽」や九州の『サークル村』とならび、地域の「小都市」がすぐれたサークルが活動する地域であり、新しい学問としては「前の国民の科学運動」とは異なるタイプのものとなるし、「戦後日本の思想は何もつくらなかった」という言説への批判にもなるだろう。「小都市」の「山脈の会」は、『サークル村』などとならんでその活動方向に「希望」が語られる存在であった。<sup>(4)</sup> 鶴見は一九六〇年代のサークル運動における「地方小都市」の意味について次のように記している。

……大都会に根拠をおいたサークル連合がほとんどつぶれるか、のびやなみの場合が多いなかで、地方の小都市にサークル連合全体の根拠地がおかれている時にかえって安定性が生じるのは、注目すべきことだ。しかも、このサークル連合は、しばしば、より大きい都会にまでメンバーをふやしてゆく。おそらくそれは、小都市が、大都会のすでにうしなってしまった雑多な職業・世代・階級のもの同士のいきいきとしたつきあいの習慣を、サークルなど成立しない以前からもっていたからだろう。サークルなどないまゝにすでにサークル的な人間関係ができているのだ。場所から言って農村と地つづきになっているが、農村ほどとざされていずに、他の都会へとむすびつく意欲をいつももっている。<sup>(5)</sup>

『朝日ジャーナル』に取材記事を書いた川口信行も、「山脈の会」について「安保以来、サークル活動が全国的に停滞してきているなかで、この「あっけらかんとした組織力」で、独自の歩み方をつづけている」と指摘している。<sup>(6)</sup> 「山脈の会」は安保闘争以後、注目を集めるサークル運動、文化運動のひとつであった。

一九六〇年代のサークル「山脈の会」を考えると、注目すべき仕事はいくつかある。

第一に、機関誌『山脈』で「安保闘争 特集」を二号にわたって企画したことである。<sup>(7)</sup> 「山脈の会」は、会員もふえ、各地域の「山脈の会」も作られ始めていた頃、安保闘争の時期に差しかかった。「山脈の会」は安保闘争について、会自体として意思表示の決議は行っていない。川口信行は、「山脈の会」の「意欲的な会員たちが、決議をしなかったことのほうが、決議をすることよりも勇気を要したにちがいない」と評している。<sup>(8)</sup>

『山脈』「安保闘争」特集号には、各地域「山脈の会」機関誌からの記録が集められた。柴愛子「看護婦 その日の私」(東京・山脈の会)、澤田恵美子「考へる 安保斗争のなかでねばり強く」(弘前・津軽山脈の会)、水澤米子「安保斗争と三池争議のなかで」(『わだち』第二号、長野・長野山脈の会)など。第一回全国集会の頃からの会員であった長野の中島博昭の作品「請願運動の倫理と系譜 松沢求策論序説」[『山脈』第26号、1962年10月号]は、国会開設請願運動の先頭にたった地域の自由民権運動家・松沢求策の「掘り起こし」の必要性を宣言したもので、「目前の事実にかかわらず、「日本の底辺の生活と思想を掘り起こす」という〈山脈〉の仕事の目標を、みごとに達成した典型」と評されたが、その課題意識は「ここに私はこの斗争の評価をしようと思わない。むしろあの渦巻にもみくちやにされた日々の体験を整理し、少しでも「安保と私」の関係を明らかにすることが私の義務」である、というものであった[『雲海』第7号からの転載]。

いずれも「〈安保と私〉〈××と私〉という発想法で語られている」<sup>(9)</sup>。この発想の根拠には「山脈の

会」独自の安保闘争へのかかわり方がある。それは「安保条約に関係した会の全体決議を行っていない。会員が各地に散在することにもよるが、まず自己が自己の現場で証言し行動し、それを複数化=組織化する方針であること、また「多数決」制や「満場一致・異議なし」賛成方式を採らない」というものであった。同時に「個人やグループが会全体を代表することを妨げない」のであって、ここでは複数の個人の行動が「山脈の会」をそれぞれ「代表」出来ること、そのことにより「山脈の会」そのものが複数化され、討論の素地を作ることが構想されている<sup>(10)</sup>。したがって、「山脈の会」が「本来異質の思想や個性を多角的に組む意図を持ち、安保闘争に際してさえ会全体の決議を行わず、会員が主体的に参加したこと」により、特集号はその「私」の複数化、多角的な組織化の方法」ともなっている。しかし、ここで注目すべきことは、「私たちのサークルが生きる場所は「私」が安易に複数化する地帯かどうか」、換言すれば「地域」のなかで「市民」として個性をどこまで貫徹しうるか、という課題から「地域」そのものとは何か、が深刻な「問い」となって浮上していたこと<sup>(11)</sup>であった。

第二に、「山脈の会」会員であった野添憲治・鈴木元彦らが岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』[岩波新書、1961年]の読解をめぐる論争に積極的に発言したことである。戦没農民兵士の手紙を収集する活動は、岩手県農村文化懇談会が呼びかけ、秋田県北では地域サークル『秋田のこだま』の中心人物・畠山正治、そして野添憲治らが参加して実践された<sup>(12)</sup>。そして、この論争のおもな舞台が『思想の科学』誌上であったこと、白鳥邦夫が参加することになる「わだつみ会」(第二次)も大きな関心をよせていたことから、「山脈の会」にとっても重要な意味を持った論争になったと考えられる。論争は、農民兵士の実態をどのように把握するか、といった問題をふくみつつも次第に「知識人の民衆理解(無理解)」といった論点に傾斜していったが、「農民兵士の加害者としての側面」を議論の俎上にのせた画期的なものでもあった。

野添の問題提起は、「農民兵士の帰還者のほとんどが、現在でも戦争を讃美し、戦地で行なったかみかみ残虐行為を自慢しておりますよ。そして、戦争経験のない若い人たちをつかまえては、兵隊に行かなければ男は一人前にならないといっています」[「知識人の優越感」『思想の科学』第33号、1961年9月]との経験から書き起こされている。野添の議論は、農民兵士をいわば「一色」として論じる傾向が少なくなく、むしろ学徒兵に「個性的・非戦的」姿勢を見出しており、さらにその批評は知識人の民衆に対する認識や姿勢をめぐる論争へと向かう契機ともなっていたが、同時に、「戦地での他民族に対する残虐行為を指摘してその反省を迫り、やがて戦中戦後の自らの体験をとらえかえし、花岡事件の調査につながっていくもの<sup>(13)</sup>となった。

すでによく知られていることだが、野添は「山脈の会」の活動のなかでも、「民話」の採録を通して「村」のすがたを考える仕事を続けていた。また、自身も「出稼ぎ」経験のなかで「戦争と出稼ぎ」[『山脈』第29号、1964年10月]の関連に注目し、さらに「俺は中国人を何人も殺した」「満州の女は…、朝鮮の女は…」という話を得々と話す「戦地帰り」の男性たちに出あってきた。野添にとっては、農民兵士をめぐる論争の経験的基礎である。そして、「昔話の採集で62年にたまたま花岡の民家を訪ねたとき、お年寄りから「まず昔話なんかよりも、花岡事件のことを調べた方がいいんでないか」と言われ、「初めて事件のことを知った」という。野添が花岡事件についてまとめるのは今少し後のこととなるが、その初心は次のように記録されている。<sup>(14)</sup>

……田植えが終わってまもなく、村の中で大騒動が起った。六月三〇日の夜中に、県北の花岡鉦山で強制労働をさせられていた中国人俘虜が……山伝いにわたしの村の奥にも逃げこんできたのである。……こうした恐怖の日が五日ほどしたある日、山奥の炭焼き小屋で、二人の俘虜が発見された。その晩は竹ヤリも土間に置かれ、村中は喜びに湧いた。その翌日、中国人を見に来いという知らせがきたので、わたしの分校でも四年生以上が六キロも離れた役場まで見に行った。役場前に座らせられている中国人は、大勢の人が囲んでいるのではっきりと見ることはできなかった。……「チャンコロのバカヤロウ」「ぶっ殺せエ」周囲からさかんに罵声がとんだ。この中国人が人を殺して食ったということを頭から信じているわたしらは、先生の号令にあわせて、「人殺し、チャンコロ！」と何度も叫び、集まっている人たちから歓声をあげた。後年、花岡鉦山を何度も訪ねたり資料を集めたりして花岡事件に首をつっこむようになったが、この事件を調べようとした動機の一つに、このときのにがい体験があるのだ。<sup>(15)</sup>

村びとのあいだに語り継がれていたであろう「花岡事件」といわれる出来事について「初めて知った」こと、さらに実は自らもそこに「参加」していた／させられていた、ことの凝視、そのことを「にがい体験」とする感性が重要だろう。続けて野添はこう記録している。「戦時中と敗戦後という二つの核のまわりには、さまざまな要素がからみあっているためきわだつたあらわれ方はしないが、この二つの核が私の原性格になつていて見つけたときは驚いた。戦争体験とか戦争責任という問題は、私らよりひと世代前の人たちの問題だと考えていたのが、急に自分の問題になりだしたのである」、「私にとって開戦から敗戦までの期間は、何度もくりかえして確めなければならない生涯の問題の一つだと考えている」<sup>(16)</sup>。農民兵士論争における野添の議論は、「戦後日本の戦争認識における被害者性から加害者性への旋回点」（安田常雄）などと評価されているけれど、その「加害者性」の自覚は、「戦争責任」という問題が、「批判」と追及の対象である「外部」=他者の問題であるよりは、自分自身の問題として改めて自らに迫って来たことによる「旋回」であった。一般に戦争認識の加害者性への転回は、ベトナム反戦運動のなかから生じて来る傾向とされているし、そのこと自体は間違っていないと考えるが、ここでは「加害者性」の自覚への旋回軸が、自らも加害の出来事に「参加」していたことの痛覚（それを忘れていたことも含む）、つまり「私」の経験へのこだわりであったことを確認しておきたい。こうした視座からのベトナム反戦運動における「私」の経験の再定義およびその位相、という問題が深められる必要があるだろう。それは自らの「原性格」（野添憲治）の再検証の試みであり、その意味で、白鳥邦夫が再刊以後の『山脈』[第14号、1956年10月]を「私の戦争責任」（執筆・白鳥邦夫）から出発させ、その観点から自らの仕事を進めて来たことと対応していた。

また、農業改良普及員の鈴木元彦は、「現場のなかで「日本の底辺」を掘り起こして行こうとする僕らに必要なのは…体験というものは僕らにあっては、それがどのように生かされるかということによってのみ価値を持つ故に、農民兵士のそれがどう生かされたかという視点で考えられなければ」ならない、という発想を基点におく。多くの農民は「規律の尊重と精神力を軍隊生活から学んだ」と答えるが、その営農態度を見ていると、彼らの言動にはよく「絶対～」ということばが聞かれる。他方、軍隊など「何も役にも立たねすよ」と答える「精農家」の農業経営意識は、常に物事というものを相対的な存在としてとらえている。彼らは農村の各種研究グループのリーダーであり、

いまの若者は軍隊に行かないからダメとはいわない。だから、鈴木にとっては「多くの農民兵士は…戦争（軍隊）体験から「何も」学ばなかつたのではなかつたろうか」という問いが浮かび上がり、その問いを通して「「生き残った農民兵士」の戦後史のなかに農民意識の変革条件のいくつかをさぐって行くこと」が主張される。<sup>(17)</sup> 鈴木「定義」と方法は、「戦争経験とは、戦争前、あるいは以後の生活経験との比較、落差の認識によって生じた感情」というものであった。<sup>(18)</sup>

戦没農民兵士の手紙の収集という活動は、「山脈の会」には「積極的に従事すべき仕事」とも言われたが、<sup>(19)</sup> それ自体、「山脈の会」全体の仕事となつてはいない。それは、「山脈の会」会員にはそれぞれの「現場」（足下一鈴木元彦）があるのであり、ねらいはやはり「私の組織化」ということに力点がおかれる。こうして農民兵士論争が「山脈の会」にとつてもつた意味は、「戦後日本の戦争認識における被害者性から加害者性への旋回」という問題と、戦争認識・体験そのものが戦後＝「今」の「生き方」（戦後史）にとつてどのような意味をもつものなのか、という重大な問いが、提起・意識化されたことであつたのである。野添にとつて「戦没農民兵士」をめぐる論争は、自らも「残虐行為」を行なうものとしての「私」の発見—あるいは再自覚化でもあり、鈴木元彦にとつては、自らが向かい合う「精農家」に体现される「農」という生き方に戦争という経験は一体どのような痕跡を残すのか、という問題であつた。戦争に学んだといい、残虐行為を得々と語る「農民」と、軍隊経験から学ぶものはなかつたと述べる「精農家」、この二つの、一見対照的にみえる「農民像」の複合が次の課題となつていくのである。「山脈の会」の方法でいえば、「私の原点（原性格）」から見えて来た農民像の「共同」による考察・記録の深まり、ということになるだろう。

第三に、「山脈の会」のなかに「山脈わだつみの会」が作られたことである。白鳥邦夫は谷川雁の議論をめぐる文章において次のように記している。

……ただ安保闘争を機に〈わだつみ会〉（のある部分）に私なりに結ばれたとっていい。「私——」を追ってきた（一応の）結着点だろうが、樺さんの死をひとまずシンボルとして受けとめて、それは私のサークル内運動の一つの折返し地点となつた。多くの人々が帰郷運動に、さらに総選挙の運動に前進したとき私は徐々にあとずさりを始めた。そして、同じ安保闘争の過程で友人が死んで、象徴は充填されてイデーに凝固し、ついである狂暴な情念と化して私の体内に棲むことになった。戦争体験の復活。〈わだつみ会〉が私に化肉し、ここで私はサークル内に、連合組織の一つとして私たちのレベルの〈わだつみ会〉を設けた。——翌三十五年になって、私の文章に「原点」なる語があらわれた。<sup>(20)</sup> ……

ただ、この点については、とりわけ「わだつみ会」の一九六〇年代における戦争体験論の位相をどのように考えるか、そのことと現実に展開しているベトナム戦争・ベトナム反戦運動をどのような関係としてとらえるのか、という問題とも関連する重要な論点となるが、本稿では準備不足のためうまく議論は展開できなかった。他日を期したい。

総じて「安保闘争」の経験は「私にとって」という位相で受けとめられ、地域史の掘り起こしや同時代の記録として作品化されていった。戦争経験が「安保闘争」の基礎にあることはいうまでもないだろうが、逆にむしろ「安保闘争」によってこそ戦争経験がふりかえられ、かつ「私」の立場から再検証されることとなつたともいえよう。一九六〇年代の民衆思想にとつては後者の側面の方がより重要かつ深刻な意味を持ったのではなかつたか。ことば自体は谷川雁の圧倒的な影響力にあっ

たとえば、「山脈の会」のメンバーはそれぞれに「原点」の意味内容を考え始め、記録し始めたともいえる。

もちろん「山脈の会」は「谷川さんの予言をなかば実践してこなかった」。鈴木元彦が提起した「私は私の足下を掘る、君は君の足下を掘れ」とする仕事を組織する方法は、谷川の「原点」論とは異質であり、「足下」は結局、「私」の足下であり、かついまだそれをよくとらえる事ができず、また「山脈の会」そのものも「「原点」を正しい意味で、私たちのサークルに継承しようという（全体的な）方針はなかった」。しかし「原点」の「概念」は、「意識空間から、時間の深部へ、根へ向けて、私に戦争体験を…友人野添憲治に『出稼ぎ十年史』を（さらに、ある会員には「学童集団疎開」の体験などを）自己の思想行動の原点として、日常性に埋没しがちな生活に貫徹して、内部から私（たち）を衝撃するものへ、結晶化しつつある」とされ、「現実の行為を内部から支え、逆に目前の事実を通して体験の記憶そのものを原理化するサイクル運動」、そしてサークル運動は「原点の複合体」とイメージされることとなる。谷川の「原点」＝サークル運動論との比較は今後の課題でもあるが、「異質」との「交流」に力点をおく谷川の議論に対して、「複数の私」の「複合」という「山脈の会」の組織論は一見、同質に見えるが、両者の差異はおそらく前述した鶴見俊輔の指摘のように、サークル運動以前の「人間関係のくみかた」の差異—議論やコミュニケーションの作法によるところが大きいと考えられる。

また、状況としていえば、一九五九年八月の第一回全国集会で議論された戦争経験をめぐる「共通の実感」の欠如、つまり「第9号から13号にかけて、そこには完全に同質の発想があり、共通の関心と使命感、友情を形成しながら、それをこえて肉体と精神をつらぬいてくる連帯感、そうしたものが疑問の余地なしに実在した<sup>(22)</sup>」という前提が崩れ、あらためて「私」と「戦争」の関係を、あるいは「戦争」と「私」の関係を問わざるを得ない場面が生まれたことも重要な時代の変化であった。「山脈の会」の初心が、15年戦争の経験に根ざし、「現前する戦争」としての朝鮮戦争がその活動の思想形成の跳躍台となっていることは確かだろう。そして、安保闘争を経て、時代はベトナム戦争の時代（「現前する戦争」としてのベトナム戦争）に差し掛かっていくのである。それぞれが「現前する戦争」と「経験のなかの戦争」を「原点」としてとらえ直し、ぶつけあうことが求められてきたとも言えようか。

## II. 自分の「桃」を持つこと—記録、と根拠地、の発想

「山脈の会」の仕事も順調に進んでいったわけではない。六〇年代にはいると、「山脈の会」には多様な地域と多様な個性を持つ「山脈の会」が作られていった。「山脈わだつみの会」もその一つではあったが、それ以外の会は「一定の活動が終ると比較的短い期間で消え<sup>(23)</sup>ていった。機関誌を継続的に発行している「東京 やまなみの会」や、被差別部落解放運動にも関心を寄せた柴田道子らによって組織され、長野市のベトナム反戦運動の中心ともなっていた「長野 山脈の会」などを除けば<sup>(24)</sup>、津軽・丹後・つくばなど各地域の「山脈の会」も順調に仕事を積み重ねていったとはいえない。

白鳥邦夫も、「私」の「原点」に固着する方法の意義を十分に認めつつ、そのことがサークルとしての創造性に結びついていない状況を指摘している。「山脈の会」は「一層、仕事は個人化し非サークル化してさえている。——当初から各会員個人が自己の原体験を固執し、意識的にそれを媒介とし



て自分を現実の内部に仕事化しようとした(その限りでは成功しかけているが)、その延長上にいまもあるわけで、それもいささか硬直化し私人化した結果共同研究や協同作業の必要も多くの仲間が認めながら、八方すくみになっているという具合<sup>(25)</sup>なのであった。

こうした状況を打開するため、六〇年代のなかば頃から「山脈の会」は「共同研究」を組織することとなる。「共同研究」の方式—その実践には大きな困難がともない「生活すること」と「学問をすること」の亀裂に苦闘したのだが<sup>(26)</sup>—は、会員それぞれが「私」にこだわり、そうして「複数化」された「私」を「多様に組織化」し「複合」すること、それが「地域」という場で如何に可能であるか、の模索であった。

共同研究は、まず「山脈の会」高校教師グループによる全国9ヶ所の高校生徒748人に対するアンケート(男性473, 女性275: 能代・石巻市立女子・土浦第一・八戸工業・熊谷・梓川・熊本中央女子・旭川・小倉南, 質問書作成には安田武・日高六郎が参加)として実施される。ここでは、「戦後の教育によって、彼ら高校生のなかに〈民主主義〉は深く根をおろしたようだ。それは、たとえ国を愛するためだといっても、民主主義の約束は守られなければならない、という考え方の多いことがよく示している」という前提のもと、「だが、その民主主義の中身はどんなものであると、彼らは考えているのか、彼らの絶対不可侵の〈民主主義〉とは、教科書で教えられた言葉のオウム返しにすぎないのではなかろうか」という重要な問いが記録されることとなる。<sup>(27)</sup>「民主主義」の「定着」と「その中身」の空洞化という問題意識の確認である。この点は後に白鳥邦夫による「戦後民主主義」は、「実存主義(個の独立)」の思想の確立しないままに「民主主義の制度や手法」が広がった」という評価につながることとなる。この「中身は空っぽ」とも指摘されている「戦後民主主義」の評価は、そこに戦前天皇制の権力構造との同質性を見、かつ「天皇が戦争犯罪を認めなかったおかげで、「助かった」と思う大勢の人々の思想」に支えられている、という戦前民衆についての「戦争責任」論と関連していた。<sup>(28)</sup>この共同研究によって、「私」を問い直すことからの「戦後民主主義」批判の礎石が打たれた。

「共同研究」は「私たちが自覚的に生き、<sup>(29)</sup>私たちが掘起し記録する営みの仕事連関を通して露呈する内実をもった地帯」のすがたをどのようにとらえるか、「〈わが町を掘起して祖国に連り、日本を捉える〉方式」の模索として実践されていった。それは「私」との関連で地域をとらえるという意味では「山脈の会」の初心であるとともに、安保闘争で提起された「私」を貫徹し、そのことによって「私」を複合化する地域とは何か、という問題を受けとめてのものであった。具体的には、『思想の科学』現地編集方針に応じて、No.14 [通巻50号]、1963年5月号に「私を描く傾向」ともなったとはいえ、能代市をさまざまな論点で分析・記録した共同研究「日本の町」を掲載、さらに「日本の町」の反省にたつてより対象をしぼった「日本の村」がNo.39 [通巻75号]、1965年6月号に、さらに「日本の集落」がNo.109 [通巻189号]、1970年11月別冊「農民の伝統」に、掲載されることとなる。ただし「山脈の会」—特に能代山脈の会は、「日本の村」に続いて、時代は「明治百年を軸として大きく右傾する」との判断から「集落の百年」(前掲・「日本の集落」)を企画するが、「共同の仕事に参加する人が増えず、逆に減っている」ことも同時に問題になっている(後述する山脈第五回全国集会での鈴木元彦の発言)。

しかし、「日本の町」「日本の村」「日本の集落」は、状況のなかでそれぞれ個性的な問題を提示

していった。「日本の町」は地方小都市のすがたを浮かび上がらせることは出来なかったが、各自の関心と方法で問題を掘り起こして記録する方法を活かしたものとなり、さらにすすんでその「複合」とは何だろうか、という問題を提示した。他方、「日本の村」は、「生活第一主義」とサークル運動との比重の問題を抱えながら（組織論）取組まれた「共同研究」＝集団による「思想」形成の試みであった。その際、意識された視点は、「自分が村民の一人であるという実践的な姿勢を保つ」こと、村を構造的に把握すること、「学問をつくる時の素材」ともなり同時に「農民たちが炉ばたで話題とすることができるものを記録し創造すること（「山脈の会」の目標の再確認）、である。「集団」による思想形成、対象と「私」を実践的に関係づける方法、「学問と民話」同時にそれぞれの「素材」となりうるという「記録」の方法と意義づけ、などがここで提起された問題として重要だと思われる。<sup>(30)</sup>

さらに「日本の集落」では、農業技術の激変とそれともなう「不安」のなかで、従来の生活、「農民という人間そのもの」を喪いつつある農民が生きていく「支え」を探り、また部落＝封建制のイメージを反転させて、「従来の生産集団としての部落を下敷きにして、新しい生産集団組織」構築への筋道を探る。<sup>(32)</sup> 現実に進展する部落の解体を、農民の「人格」＝部落が長年にわたって形成してきた情念や意志の複合体を解体すること、ととらえる視点、ひいては一九六〇年代日本社会の「人間不在」を衝くものとなっている。<sup>(33)</sup> 「日本の集落」で考察された「営農技術」と農民の「人格」「精神」などという論点は、白鳥の議論にも引照されていく。

一九六七年八月五日から八日まで「山脈の会 第五回全国集会」が秋田県能代市で開催された。<sup>(34)</sup> 白鳥邦夫は、開催にあたって「山脈の会」の基本的な仕事でもある「記録」について、その重要性を改めて再確認する。白鳥は集会記録のなかで、むのたけじ（注一集会の講演者であった）・岡村昭彦『一九六八年 歩み出すための素材』[三省堂新書、1968年]からいくつかのことを「痛切」に「学んだ」という。うち一つは「同情は連帯を拒否したときに生まれる」というテーゼであるというが、さらに一つは北海道恵庭事件・裁判闘争における野崎健美兄弟はじめ家族の「日記」の意味である。運動は記録なくしては成り立たない。つまり「日記が私（と私たち）の歴史であり歴史文書であること、「わが家の年表」が同時に「たたかひの武器」であり、現代史の証言であること」の再認識であった。酪農家・野崎氏の一家族が記録していた「日記」は、自衛隊演習による騒音被害を具体的に明らかにすると同時に、家の年表そのものとなっていた。そしてその視線は新潟水俣病対策に奔走する農民・近喜代一の「営農日記」（のち宇井純『公害の政治学 水俣病を追って』[三省堂新書、1968年]）におよび、能代集会の底を流れる一つのテーマとなった。そのことを白鳥は「「私の日記」の複合化、「わが家の年表」の組織化、それがサークル運動であろう。……「日記」の統一戦線によつて、「連帯を拒否したときに生まれる同情」を拒否して、連帯を創造することができるだろう」と述べる。

だから、白鳥は「いま私にとって大事なものは八・一五が原点になりえない」という岡村昭彦の発言を深刻に受け止める。「山脈の会」にとっては「会員の一人ひとりが、自分の思想（生きる）の原点をどこに持つか、ということは根本的に大切な課題」であった。「自分がどこにいるのか、どの年表をふまえて発言しているのか、ということがつねに要求される主体」が「サークル会員」であり、サークルとは「原点の複合体（空間的に時間的に）」と定義される。「体験と記録」は「孤絶性」に

より異質である、しかし「その異質なものの連帯をめざす運動によつて、主体的に自己を現実のなかに組織する行為によつて、それはきびしい表情の似かよいを創りあげるのだ<sup>(35)</sup>」。

「記録」をめぐる白鳥は同時期、生活記録運動について批評を行っている。白鳥は、一九五〇年代生活記録運動の最良の遺産ともいべき「自分自身を作り変える」こと（鶴見和子）、さらに「山脈の会」が固執して来た「書き続ける、ということ」をふまえて次のように述べる。

…青年婦人をめぐる状況はもっと悪化しているように思われる。脱政治化が進むか、逆に政党系列の縦の関係が優先して、いっそうの弱体化がみられ、かつての啓蒙家が去り、社会教育の機関をはじめ今日の指導者が技術主義に傾いているのと照応して、青年婦人のなかに変革への意志や行動を育てることはむずかしくなっている。こんななかで私たちはもう一度「自分の参加しない歴史は生きたくない」「持続こそ美德である」とする初心にかえって、たくさんの無党派の政治的関心の高い自分たちを育てあげ、小集団をつくり、横のつながりである連合組織をつくること（そして多くのほかの市民運動の組織などとゆるやかに連携しながらすすむこと）に執念深くなることであろう…。

そして記録とは、自分と仲間を組織化する「方法なり武器」なのだ<sup>(36)</sup>。

また、次の批評からは、前述したように「営農日記」などが改めて注目されてくる文脈がよく分かる。「家族ぐるみで米作に従事するなかでヨメや次三男の「人間解放」を意図した生活綴り方の活動が、「反封建」の一定の役割を果たして退場した」。その後、生活記録運動は「全体として停滞している」が、例えば青年グループの営農記録など「「経営の記録」は広範に生活に入っている」。もちろん、「それはすぐに生活記録とはいえない。養豚日誌や西瓜メモを通して、それを踏まえて、全生活を捉えかえすことのできる記録を創造することである」、「米と西瓜、米と豚を統合する視点をつくる方法に生活記録運動があるし、両者を支える新しい政治性に立つ「反独占」の視点が同時にサークル運動の停滞にカツを入れるだろう」と。しかし、現実には、営農「技術に閉じこめられ、出稼ぎに「分散」させられている<sup>(37)</sup>」。

そのことをふまえて白鳥の提起は「戦中派には、この十年間にどのように戦争体験が作用あるいは非作用したのか。十代の若者は、現実をどうとらえて、私ごとき古きものへ迫ろうとするのか」というものであった。「問い」は「もう一度サークルを活力あふれたものとしてきたえなおすには？」、だから「この集会は「山脈」の十年の歩みの総点検の意味をもっていた<sup>(38)</sup>」。

集会では、「一九七〇年への視点」（第一・第二分科会）、「ある日の私」（第三分科会）にわかれて討論が行われた。第三分科会では主として「差別の問題」が扱われた。養護教諭や同和教育実践、女性・職場の苦悩、朝鮮人問題、「へき地」の問題などに携わっている会員が話題を提供し、「ある日の私」という「山脈の会」の流儀で討論が行われている。「一九七〇年への視点」をめぐるのは、ベトナム戦争をめぐる状況などが話題となったけれども論点が焦点をむすばないきらいがあった。そして、次第に「マイホーム主義」という意識の出現が中心的な問題となっている。「若い人たちの「マイ・ホーム主義、が戦争の問題と結びつかない<sup>(39)</sup>」。

白鳥の「まとめ」のことは新聞記事によると次のようになっている。

……ぼくはいつも世間から二年ぐらいおくられている。だからこれからマイ・ホーム主義でいこう。家庭を「後方の思想、の根拠地にしようと思うのだ。そして自分が自分をつくっていく姿

---

勢を持続させていこう……<sup>(40)</sup>。

「戦争」と「家庭」(マイホーム!)、日常生活(「ある日の私」)と社会に偏在する「差別」、この二つが六〇年代後半にむかって「山脈の会」がとらえようとした主題(テーマ)であると一応は指摘してみることは出来るだろう。それは、「対岸の火事」(T. ハイブンス)といわれたベトナム戦争と「私」の関係をどう認識するか、ということであり、また沖縄や女性もふくんだ「差別」はようやく六〇年代末に本格的に「問い」として出されてくるものであった。その意味で、第五回山脈全国集会は、まさに「山脈の会」の「一九六八年」問題の波がしらに位置付けていたのである。そして同時に、「運動は「私」の記録なくしてはなりたたない」というかたちで初心が確認され、かつ「記録」からどのように全体を視野に収める視点を考えぬいていくのか、という観点での提起が深められているともいえるだろう。そしてそのためにこそ「私」への繰り返しの問い直しが大事になる。

同じころ白鳥は二〇歳を超えたばかりの営農グループの若い青年たちと「郷土」についての討論を行っている。青年たちの討論は、「郷土とは先験的に所与のものとしてあるのでなく、みずから作り変え、造り出すもの—自分の体内に仲間たちの間に(ここでサークルの意義が説かれた)目前の仮構の「郷土」に絶望し、憎しみぬいて、しかもそこに踏みとどまり、創り替えていくことである」と結ばれる。ではこうした「結論」を持続させていくエネルギーとは何だろうか? 同時に、話し合いのなかである果樹(桃)栽培農家の青年は述べている——「自分の作った桃を本当にうまいと思って食うことの出来る生活、その生活をやり通す場所が郷土だと思うんだ」。白鳥は次のように批評する。

……ここには、桃を単に植物学や栽培技術の対象のクダモノでなしに、自分で味わう実感を基礎に、桃を通して経済を構造的に捉え、桃を貫徹するものを鋭く予知し、桃のかなたに世界が開け、人間(たちの連帯)を見出そうとする思想の萌芽がある。とすれば、この桃が彼の「根拠地」であり、その思想の核となるものである。青年たちはそれぞれに「自分の桃」を持つこと——さし当り、ねばり強く苦悩にみちた生活の戦いの痛みにニガイ桃であろうと、それが郷土を造出するのである。<sup>(41)</sup>……

「山脈の会」の共同研究＝「日本の集落」で記録されたような、地域社会(農村)の激変、「主体的に自ら変り、周囲を変えているとはいえない」農民の姿。これに対し生産物を商品や技術革新の対象として見るのではなく、人間(私)との生き生きとした交感(「自分で味わう実感」)のなかで見ると、こうした方法に「根拠地」構築の企図がかけられている。白鳥は、高度成長で変貌する地域社会のなかで「根拠地」の意味を探っていた。

### Ⅲ. 「情念の解放」—「一九六八」と「子ども」

安保闘争の際と同様、「山脈の会」は公式にベトナム反戦運動の実践を運動方針としたことはなかった。「元来、会としての公式の、また一定の、思想とか運動方針といったものは採用していません。…ベトナム戦争に対しても、会全体としての運動があるわけではないし、指令が天下ってくるようなことも全くありません。各自が自分の判断にもとづいて、あるいは各地の会が日本国憲法の理念にてらして、といった形で取組むことを期待し合っているだけです」と述べられている。<sup>(42)</sup>

一九六六年一〇月二一日の闘争は、労働者がベトナム反戦を課題としてストをうち、国際的にも注目されたものであった。この日前後の秋田県高等学校教職員組合による「二一闘争」について、白鳥邦夫は「わたし自身を解剖する仕方」という方法的立場からのすぐれた記録を残している<sup>(43)</sup>。「二一闘争」は「総評を中心とする全国の労働者」が、「ベトナム反戦、首切り合理化反対、最賃制確立、公務員賃金大幅引上げの四つの柱を軸に」ストライキをもって闘うものであった。そして、「二一闘争」の「前段闘争」として高校教師は「民主教育確立、ベトナム侵略反対、大巾賃上げ」と書いたビニールの「黄色いリボン」を一〇月いっぱい胸につけることが指令されていた<sup>(44)</sup>。

しかし組合の会議で最終的に決められた決議では、「二一闘争の趣旨も戦術も総くずれになった」し、「黄色いリボン」も白鳥の勤務校では「霧散」してしまった。白鳥はここから闘争を通じて見えて来た自分自身の問題＝「高校教師の思想をとりだして検討」するという課題をたてる。白鳥は、「生徒を闘争にまきこむな」という大義名分論や「統一行動」テーゼという「思想」を検討したのち、高校教師が持つ「地方の小都市における相対的な社会経済上の安定や、「高い」学歴からくる「専門的知識人」という自尊心…それらがすべて擬制であることの自覚の欠除」を指摘する。そして「二一闘争」の実態は、「現実には人間の腹の底からの情念の噴出が皆無に近いところへ、戦術が日高教（全国組織）中央から天下り式にあたえられたのだ、というのが実際の姿であった」と評価されるのである。高校教師たちは、リボンをつけるという「小さなこと」すら「過激な想像力によって幻想的な恐怖のシンボルに変質」させ、「慎重さと恐怖心から、権力の評価を常に最大限に考え、自己の力量は常に最小限に考える」姿勢である。であるからこそ白鳥は「力量の小ささにふさわしい用語を造出」することを提案する。「ベトナム侵略反対」には「ベトナムに平和を！」、「リボン闘争」には「リボン行動」をと…。そして教師たちには、「教師よりよほどベトナムに関心のある」高校生たちに「ベトナムのことを語る」ことを求めるのである。それが「良識」や「教養」を組合運動に注ぎ込むものであり、「自己の尊厳と生徒の可能性の双方に信頼すること」なのだ。

「情念」の不在と「上からの指令」—それは作文教育などにおける若い教員の「要するに…だ」という発想方法にもみられる。高校生の「表現」論が論点だ。そもそも「人間とは存在することそれ自体が表現なのであり…大事なのは、方法である。機会であり志である。記録しないでいられるか、書かずにおくものか、という問題意識と、それに方向性を指示する教師の指導力」、「高校生がすぐれた作品を綴れないとすれば、それは表現力がないのではなく、書かずにいられようかという問題状況を設定してやれない教師の責任なのである」。それは生徒の可能性への信頼であり、そのために高校教師は「自分の体をつかって経験し、可能なかぎり広汎な経験をし、それを意味づけ、組織すること」、「その体験の思想を教室に生かすことによって…教科書と生徒の肉体との間に、知識と情念の行きかう運河を建設すること」が求められるのである。

「知識と情念」は——「生命と知性」との統一という白鳥邦夫ら「山脈の会」の初心の一つであるが、ここでは地域の小都市におけるベトナム反戦運動の底に、また地域では知識人であることによってその場の文化状況を規定する高校教師の教育姿勢に対する批評の底に、「情念」の復権とでもいべき論点が横たわっていたことに注目しておきたい。

白鳥の文章には「全共闘会議」の突き出した思想と方法を評価するものが散見される。「〈自立・創意・連帯〉という反戦青年委や全共闘の人たちの思想は、私が三〇年代（注一昭和30年代、つま

り「山脈の会」サークル運動で)にいち早く(?)予見したサークル運動のあるべき姿を、かなり純粋に、しかも今日的に表現していると思う。地域のサークルである「山脈の会」には「急進的」な仕事はできないけれども、「根本的」であることは出来る。「ラジカル」とはそういう意味だ。<sup>(45)</sup>

同時に白鳥がこだわったのは次の点である。

……私が特に知りたいのは、学生の激しい行動を支えている体験と思想の根はなんであるか、ということだ。…青年が「戦争体験」にこだわらないのは仕方ないでしょう…それは六・一五でもよく、一〇・二一もまた原点になりうるだろう。だが問題は(先日東北大学の人たちと話したのだが)青年が戦中派を「めめしく回想にふける八・一五同窓会」だと嘲笑していると、この移り気の国では、もうすぐ次の世代から同じように「一〇・二一同窓会」だと言われるだろうことを自覚しておくほうがいいということである。「角材」を平和主義の象徴であるとともに統一戦線の原理とするものは、その自覚の痛みである。<sup>(46)</sup>……

そして白鳥は「戦争体験」とはまた異なった「原点」を記録していくこととなった。一つは六〇年代には「故郷」・長野県上水内郡豊里町公民館長を務めていた歌人・教育者である父・白鳥義千代の「戦争責任」の追及・認識である。<sup>(47)</sup>「義千代はついに戦争責任を(すくなくとも歌人として、作歌上のありようとして)果たすことなく終わったということ、換言するなら、この父と私の(そして、二人をふくむ民衆の)戦争体験とその責任を問うべき仕事が残っている」。<sup>(48)</sup>

そして、もう一つは一彼自身のことばでいえば「自分の戦後史」の記録であるが—かつて小学校教員であった頃の「子どもの記録」である。<sup>(49)</sup>白鳥の「現場」はつねに高校(教育)であった。白鳥は言う。子ども(生徒)たちの「可能性とその実現のため」には、なによりも彼・彼女たちが「〈自由になる〉ことが大事です」。「完全に「でたらめ」の境位を体験することです。換言するなら、個人の充分な解放(……からの自由)と、そこから自立し、自立することを通して他者と連帯することだといったらよいでしょうか」。<sup>(50)</sup>

「『小学校六年』の一と」以来、白鳥が記録してきた「長野県上水内郡神郷小学校 六年松組」の子どもたちの活動は、クラスの「崩壊」にもかかわらず実践された「いのちがけで好きなことをしよう」という「自由の世界」から、子どもたち自らが「ルール」=秩序を形づくっていった経験であった。<sup>(51)</sup>

一九六八年の「問い」と戦後初期の子どもたちの経験をぶつけあわせて考えるところに白鳥邦夫—「山脈の会」の方法的個性がある。それは、教育そのものの意味が問われていた時代状況のなかに自らの原点を対峙させるユニークな問題設定であり、そこから「情念」という「私」を支える重要な精神が改めて注目される。表現の巧拙が問題なのではなく、表現の基礎にある問題意識—情念を噴出させ、その組織化をはかることへの問題意識の欠如こそが問題になるのである。同時代に「山脈の会」は共同研究方式をとった仕事をしていることも関連している。白鳥は次のように述べる。

……六〇年代の終りのころ、いわゆる学園闘争のなかで、「全共闘会議」の学生たちがかかげたテーゼに〈自立・創意・連帯〉というのがありましたが、この意味を鋭く正確にとらえたいものです。それには、その運動の「挫折」の意味や過程までもふくめて考えて、それを私は、小学生の生きざまと重ねあわせて、また現在のサークル運動のありようとつきあわせて、具体的に考えてみる必要があると覚悟しております。サークルというものが〈自立した小集団〉である

こと、その小集団同士の交流から〈サークル連合〉といったものを考えるにつけて、子どもたちが教えてくれた〈集団学習〉の意味を大切にしたいと思うのです。<sup>(52)</sup>……

白鳥にとって「教育」とは若者の〈情念の解放を促す〉ことである。であるからこそ「教育も学習も現実には〈サークル〉の形をとることが肝要だということになるでしょう。私はつねづね高校教員という立場にいたので「教室の内外にサークルの氾濫を！」と唱え続ける。教室「内」と「外」に視点が及んでいることがここでは重要だろう。つまり教室（ないしは学校）という制度を越えて、地域の生きる人びとにとって〈情念の解放〉とは何であり、そこから生まれる「教育」の中身は何であり、その組織化としてのサークルはどのように具体化されるか、という問題があるからである。白鳥の「現場」がここにある。

「一九六八年」の「問い」は、戦後直後の子どもたちの経験からも「問いなおされる」こととなる。しかし、そこにはある「原点」が存在していた。白鳥は次のように述べている。

……私は子どもたちのなかにはっきりと〈人類〉をみたのです。…子どもたちとその生活のなかにすべてが<sup>・</sup>あ<sup>・</sup>っ<sup>・</sup>て、そこからどれだけ学ぶことができるか、そしてサークル運動とは、その〈子ども〉たちをどれだけ私たちの内部にとりこみ、あるいは私たちのなかに発見して再創造をすることができるかを考えながら、生涯にわたってそれを実現していく行為だと言い換えることができるでしょう。<sup>(53)</sup>……

もとより暫定的な結論となる。内部に多様な経験を抱えつつ、それぞれの「私」にこだわり、問い直し続ける作法を初心として持つ白鳥邦夫とサークル「山脈の会」にとって、一九六〇年代は、変貌する地域社会のなかで、実際に、再び、みたび「私」を「記録」しなおすことによる「私」そのものの再検討が具体的に実践された時代でもあった。それは、安保闘争で課題化された「私」と「地域社会」の問題であり、サークル活動や諸々の論争のなかで浮かび上がった共同研究という作法の実験を通して明確になってきた単なる産業・生業ではなく「人間」そのものをも変貌させてしまう時代状況に向かい合うことであった。「私」の見直し、あるいは「私」の見直しを活かきる共同性の模索を通じて、「私」を旋回軸として新たな問題を記録し、対峙することは如何に出来るか。この「問い」が、白鳥邦夫と「山脈の会」の一九六〇年代であった。それは、現前するベトナム戦争は、「私の戦争体験」と「いまの私」と戦争をどのようにぶつけ合うかという課題とも関係していた。白鳥にとって、それは「情念の解放」という問題の再認識ともなるが、「山脈の会」が持つサークル運動以前に存在した「つきあい」の変化そのものはどうであったのか、という問題は残るだろう。

一九六九年に開催された第六回山脈全国集会（埼玉県飯能市）では「安保問題」は分科会から外され、「真正面から安保問題に取り組まないというのは、いったいどういうことなのだろうか」と批判されている。「安保体制下のサークル運動の中でも、何も学びとっていない」のだろうか？ 同時に「人間回復の場としてのサークル」が「マイ・ホーム主義」のなかに「深く落ちこんでいく」のではなからうか。「六〇年安保闘争後のさまざまな運動の中で、サークルほど自己にたいしても七〇年問題にたいしても曖昧で、中途半端な存在はなかつたようである」。<sup>(54)</sup>これまで見てきた「山脈の会」の営みのなかから聞こえてきたこの「問い」から改めて六〇年代論は構想されるのかもしれない。

註

- (1)——大竹勉「山脈の会」思想の科学研究会編『共同研究 集団』平凡社、1976年、118頁。「山脈の会」と白鳥邦夫についての私見は戦後直後期について、拙稿「民衆と戦争責任の思想」『日本學報』（韓国日本学会年報）第114輯、2018年2月で記しておいた。また地域における文化運動・社会運動が抱えていた課題については拙稿「戦後」地域社会運動についての一試論』『日本史研究』第606号、2013年2月を参照。
- (2)——鶴見俊輔「サークルと学問」『思想』第463号、1963年1月。
- (3)——一九五九年八月・第一回全国集会での提案、白鳥邦夫『増補版 無名の日本人』未来社、1978年、53頁。
- (4)——藤田省三・鶴見俊輔「対談 分裂と連帯について」『思想の科学』No.6 [通巻第42号]、1962年9月。
- (5)——(2)に同じ。
- (6)——「あっけらかんの組織論」『朝日ジャーナル』第5巻第30号、1963年7月28日。(筆者は川口信行)。
- (7)——『山脈』第25号、1961年10月、第26号、1962年10月。
- (8)——(6)に同じ。
- (9)——白鳥邦夫「運動は自分たちの手で」『思想の科学』第31号、1961年7月。
- (10)——白鳥邦夫「山脈の会の報告 国民文化会議のよびかけに応じて」『山脈』第25号、1961年10月、同「安保反対斗争と文化運動」『国民文化』第11号、1960年7月。国民文化会議での「山脈の会」の位置づけについては拙稿「国民文化会議の誕生と曲折」君島和彦編『近代の日本と朝鮮』東京堂出版、2014年で言及した。
- (11)——(9)に同じ。
- (12)——白鳥邦夫『無名の日本人』未来社、1961年、140頁。
- (13)——赤澤史朗「農民兵士論争」再論』『立命館法学』第271・272号、2001年2月。
- (14)——野添憲治『紙碑を刻んできた』さきがけ新書、秋田魁新報社、2012年。
- (15)——野添憲治「八月一五日まで」山脈の会編『私たちの昭和史』思想の科学社、1989年、65～66頁。
- (16)——野添憲治「八月十五日まで」『山脈』第31号、1966年4月。
- (17)——鈴木元彦「農民兵士の戦争責任」『思想の科学』第35号、1961年11月。
- (18)——前掲・白鳥邦夫『無名の日本人』、138頁。また、鈴木元彦「農民—その戦争経験」『山脈』第22号、1960年1月も参照。
- (19)——前掲(12)・『無名の日本人』、140頁。
- (20)——白鳥邦夫「谷川雁論」『思想の科学』No.31 [通巻第67号]、1964年10月。また、ここで提起されている論点の一つは、「敗戦によって封じこめられた少年ファシストたちだけが農本主義の延長上に、反農本主義の旗をかかげる土着の前思想的集団をつくりだした」という谷川の白鳥に対する評価の意味である。
- (21)——同。なお、白鳥は、地域青年会も「サークルの一種」との認識を前提にして、「サークルとは、系列化する政治組織にたいして横のつながりの組織」、「個人の主体性を基礎にして人間の連帯性を……造出するもの」、「自分の経験以前の思想の綱領や、また中央の指令といったものはない」と述べ、望むべきサークル運動組織として「地域連合ではなくて、仕事連関、それも異質の目標やジャンル、思想や方法をもつたサークルの連合体……逆にいうと一つのサークル内に多様な小集団をふくんだ形態」を構想している。それは地域青年会の組織的歩み—網羅組織から専門別組織、やがて機能集団へと転換してきたことと似ている、との興味深い指摘もある(白鳥邦夫「わたしのサークル論」『秋田の青年』[秋田県連合青年会機関誌] No.20、1963年7月)。
- (22)——前掲・白鳥邦夫『無名の日本人』、117頁。
- (23)——「〈類別山脈の会〉の発生・消滅はきわめて自由で、どこに出没してもよく、これからもまた、その類の新しい会が出てくる可能性はじゅうぶんある」との指摘がある。前掲・大竹勉「山脈の会」。
- (24)——清水恵美子「ベトナム戦争ティーチ・インの記録」『山脈』第32号、1966年12月。
- (25)——白鳥邦夫「山脈の会をかたる」『月刊社会教育』第60号、1962年11月。
- (26)——「日本の村 共同執筆の経緯」『思想の科学』No.39 [通巻第75号]、1965年6月。
- (27)——安田武「われらハイティーンかく思う 自分・スイス・民主主義」『太陽』第1巻第2号、1963年8月。白鳥は、白鳥邦夫「ルポ 北方の青春」(久保田浩・森久保仙太郎編『教室の手帖6集 思春期の子どもたち』誠文堂新光社、1956年、192～194頁)、同「高校生は何を考えているか(一)」日高六郎監修/立正大学哲学研究室編『講座・社会と倫理 第5巻 現代の倫理と倫理教育』日本評論社、1966年、149～175頁、など、自身が向



かい合う高校生の意識について独自の調査を報告し続けていた。この仕事は、こうした観点をより広汎なサークル仲間との共同で行う試みでもあった。なお、「高校生は何を考えているか(一)」では後述する農村社会の変貌ともかかわって、「勤労主義が日本の民衆の一つの大きな思想だったと思うが、現代はその種の勤勉主義・誠実な働き者の思想は通用しなくなった」と指摘されていて興味深い(159頁)。

(28)——菊池嘉久「真夏の酒談—白鳥邦夫先生から学ぶ」『山脈』第76号, 2003年2月。

(29)——白鳥邦夫「町の若者たち—サークル運動論」『思想の科学』No.14 [通巻50号], 1963年5月。

(30)——「[日本の村]の視点」『思想の科学』No.39 [通巻第75号], 1965年6月。

(31)——野添憲治「崩壊する農民の精神骨格」『思想の科学』No.109 [通巻第189号], 1970年11月別冊。

(32)——鈴木元彦「農業生産技術の変化と集落」同。

(33)——白鳥邦夫「集落におけるシンボルの混乱」同。のちに白鳥邦夫『山脈の途上にて』而立書房, 1967年に収録。

(34)——能代山脈の会編『第五回山脈全国集会の記録』山脈編集部, 1968年11月30日。

(35)——白鳥邦夫「記録について」, 同上『第五回山脈全国集会の記録』。

(36)——白鳥邦夫「生活記録—書き続ける、ということ」『信濃毎日新聞』1969年3月14日付。

(37)——白鳥邦夫「生活記録運動のゆくえ」『展望』第94号, 1966年10月。『山脈』誌上には中川新一「仲さんの養豚日記」『山脈』第31号, 1966年4月が掲載されている。

(38)——「戦争体験とマイ・ホーム主義」上, 『毎日新聞』1967年8月15日〈夕刊〉。

(39)——「戦争体験とマイ・ホーム主義」下, 『毎日新聞』1967年8月16日〈夕刊〉。

(40)——同。

(41)——白鳥邦夫「桃の話」『現代の眼』第8巻第11号, 1967年11月。

(42)——山脈編集部「山脈だより」『山脈』第32号,

1966年12月。

(43)——白鳥邦夫「[「専門家という自尊心」を葬れ] 会田雄次ほか『現代高校教師論』明治図書出版, 1967年, 一部改訂のうへ前掲・白鳥邦夫『山脈の途上にて』に収録。

(44)——「秋田県高教組情報」1966年9月26日, 同上より。

(45)——白鳥邦夫「帰郷運動」『朝日ジャーナル』第12巻21号, 1970年5月24日, 前掲・白鳥邦夫『山脈の途上にて』に収録。

(46)——白鳥邦夫「地方の町で」『展望』第121号, 1969年1月。

(47)——白鳥邦夫「白鳥義千代伝のためのメモ」『山脈』第24号, 1961年2月, 同「ある歌人の戦争責任」『密造者』第2号, 1965年12月, 前掲・白鳥邦夫『山脈の途上にて』収録, 同「父と子」『教育』第18巻第2号, 1968年2月。なお, 邦夫にとって父・義千代は「保守主義」者でもあり, ここに白鳥と「山脈の会」としての「保守」の意味を考える手がかりもある(「日本保守主義者の肖像」『思想の科学』第20号, 1960年8月, 「ある保守主義の構造」と改題して前掲・白鳥『山脈の途上にて』収録)。

(48)——同・「ある歌人の戦争責任」。

(49)——白鳥邦夫「[「小学校六年生」の—と]」『山脈』第32号, 1966年12月。

(50)——白鳥邦夫「サークル運動の「原点」から」『月刊社会教育』第245号, 1977年12月。

(51)——白鳥邦夫『こどもの共和国—神郷小物語』山脈出版の会, 1980年, 拙稿「戦後子ども論」安田常雄編『シリーズ戦後日本の歴史4—社会の境界を生きる人びと』岩波書店, 2013年。

(52)——前掲(50)・白鳥邦夫「サークル活動の「原点」から」。また白鳥邦夫「情念の解放」『月刊社会教育』第337号, 1985年1月。なお「情念の解放」という論点については, 高度成長期の社会文化運動の検討をへて方法としての「自然成長性の復権」を提唱した安田常雄「社会・文化の視座と民衆運動史研究」『歴史学研究』第859号, 2009年10月増刊号に示唆をうけた。

(53)——前掲・白鳥邦夫「サークル活動の「原点」から」。

(54)——野添憲治「サークル的連帯なるもの」『思想の科学』No.95 [通巻第175号], 1969年11月。

(信州大学人文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月20日受付, 2018年10月1日審査終了)